

福島原発事故による海洋汚染

— 漁業再生に向けた闘いが続いている —

上田 昌文 (NPO 法人市民科学研究室・代表理事)



福島原発事故による海洋の放射能汚染は、第一に、事故後三週間ほど経った時点での溜まった汚染水の放水と二号機からの高濃度汚染水（総計四七〇〇兆ベクレルと推定）の漏洩、第二に、陸上に降下した放射性セシウム等が雨水にさらされるなどして河川を通じて溶存した状態であるいは土や

落葉に付着して海に流入すること、第三に、事故後二年を過ぎた時点から取り沙汰されるようになり現在も引き続いている原発サイトからの汚染水漏洩、そして第四に、今後長期にわたる廃炉作業の際に起こるかもしれない再汚染事故、が関わる。

これらが魚介藻類をどう汚染するかは、事故前にある程度の調査研究の蓄積があつたとは言え、事故後にモニタリングをはじめて判明したことが多かつたし、未だに予測ができない点も少なくない。第一は過去の話だが、第二第三は現在進行中であり、第四では何が起こるか予測しがたいために大きな不安がのしかかる。

原理的なことと言うと、海洋汚染は除染を必要とする陸上の汚染と違って、

比較的速やかに汚染物質が拡散し、原発サイト周辺海域の汚染も次第に沈静化に向かう（ただしその浄化能力を超えた量が流入し続けると汚染が固定化される）。また、食物連鎖のために大型魚ほど放射性セシウムは濃縮されやすいが、海産魚は体外に塩類を排出する仕組みを持つので、海水中の汚染濃度が下がればそれに応じて魚自体の汚染も収まっていく（淡水魚は逆に体内の塩類を保持する仕組があるので汚染がなかなか下がらない）。

現に、海水の汚染は事故後四年を経て、原発建屋前の港湾周辺を除いて、震災前に戻った（海底土は場所によって高い値が残っているが全体として低減している）。そのことを反映してカレイやヒラメなどの底魚類では基準値超の件数

の減少傾向は遅いものの、大半の魚種で基準値を下回るようになった(基準値超は福島県で二〇一一年四〜六月で検体数全体の53%だったものが、二〇一四年十〜十二月は0%)。

しかし、では基準値超の魚種以外についてはすべて採捕の対象となり自由に出荷がなされるのかというと、まったく違う。まずは漁業の全面自粛がなされ、その中で検査体制を確立し、モニタリングの結果を見ながら、操業自粛と出荷制限を解除すべき魚種と海域を決めているので、未だに多くの海面・内水面において操業自粛や出荷制限が続いている。事故後四年が経つても、漁業者のなりわいが再生されたというには程遠い現実がある。

二〇一二年六月からは、漁協が管理の主体となり、福島県による検討や地域漁業復興協議への諮問も含めた体制で魚種・漁場・検査方法・出荷の可否などを細かくチェックしていく「試験操業」が始まり、拡大している。国の指針によれば、二〇一五年度の検査対象品目は、二〇一四年度に50Bq/kg超の放射性セシウムが検出された品目に限定されるわけだが(海水・ヒラメ、カレイ類、アイナメ、メバル・ソイ・カサゴ類、サメ・エイ類、マダラ、エゾイソアイナメ、ホウボウ・サブロウ、クロダイ・ボラ、ス

ズキ、フケ類、アナゴ類、マグチ、淡水・ワカサギ、イワナ・ヤマメ・マス類、ウグイ・フナ類・コイ・モツゴ、ウナギ、アユ、オコチバス、アメリカナマズ、甲殻類)、試験操業においては「2ヶ月以上安定して50Bq/kgを下回らないと出荷自粛を解除しない」といった厳しい措置がとられていて、福島県では今年の二月の時点で34魚種、福島県外では宮城県と岩手県の一部でスズキとクロダイ、茨城県でスズキ、シロメバル、コモンカスベ、イシガレイが出荷制限のままである。「風評被害」を回避して消費者の信頼を回復しつつ、一刻も早い操業再開を目指そうとしている漁業者の苦渋がみてとれる。

この労多い慎重な取り組みを瓦解させかねないのが、これまでに何度も報じられてきた汚染水漏洩の事故であり、「漁業者の合意のもとに」とは言うものの再汚染のイメージが払拭できない、処理水の放水である。魚類の汚染濃度が跳ね上がるレベルではまったくなくとも、「汚染水が広がった海域で試験操業するのか」との消費者の非難は起ころ。それをめぐって漁業者の間でも意見が割れる。こうした事態が繰り返されれば、漁業を離れる者も多く出てくる。

戦後の工業の拡大によって日本の沿岸部の姿は激変した。産業活動の結果生まれる多種多様な汚染物質は、多くの

上映会ご案内 ふるつてご参加を!

映画「シロウオ」原発立地を断念させた町

◆日時: 10月20日(火) 昼14:00
夜19:00の2回。各回30分前開場。かき監督アフタートークあり。

◆会場: 国分寺市立いずみホール
(JR中央線「西国分寺駅」南口前)

◆料金: ①前売券1,000円(申込は、FAX ☎0423817770に住所・氏名電話番号・昼夜の別・枚数を明記、受付中! ②当日券1,500円
◆主催: 映画「シロウオ」国分寺上映実行委員会。

場合、最終的に海に行き着き、海を生業の場とする漁業者にその負担がのしかかる。自然に依拠している生業に、自然破壊のツケを払わしてきたのである。原発事故はそれに追い打ちをかけ、有史以来人と海・河川の間で成り立ってきた営みの息を止めかねないものであることを見せている。私たちがそれにどう抵抗し、まっとうな回復をはかるかが問われている。

●市民科学研究室は、食、医、住、ナノテク、電磁波、放射線などの領域で市民主体の調査をすすめている。意見・立場の異なる専門家を招いて実施した「放射線リスク専門家フォーラム」の結果をホームページで公開中。(正会員)

HP = <http://www.shiminkagaku.org/>